

ザ・ペンズ サロン

筆者の豊富な機微に通じた人生経験から、夢と希望の光を希求する、次世代へのメッセージ!

ジョークサロン会員／リレーエッセイ ⑫

北海道鉄道の旅

今昔(昭和と平成)物語

小学生の頃から鉄道が好きである。

それは当時の地元(大阪府枚方市)を走る京阪電気鉄道の勇姿に魅了された。小学校の唯一の休み・日曜日は朝から最寄りの香里園駅へ出向き、午前中ずつと電車を眺めていた。この「病」は長じても続き、日本中の鉄道に愛着を持つようになる。

北海道を鉄道で旅したのは1972(昭和47)年と1990(平成2)年の2回。今回はこれを綴ってみたい。かなり記憶の薄れたこの旅を強烈に思い出させてくれたのは鉄道史研究家であり、ジョークサロン快鳥の曾田英夫さん。保管されている古い時刻表のコピーを提供して頂いた。厚く御礼申し上げたい。

その1◆青函トンネルも北海道新幹線もない昭和の「初の北海道鉄道の旅」
初めての北海道を一人旅し、当時の国鉄(日本国有鉄道)を縦横に乗りまわったのは大学2年生の1972年の夏休み。出来るだけたくさん安く乗れる切符は道内の普通・快速列車と急行の自由席が16日間乗り放題の「北海道周遊乗車券」。東京都区内発着・学割で7600円。「これしかない!」と早速購入した。

都区内から青森までは東北本線、常磐線、奥羽本線等々好きなルートが選べる。まずは最も速い東北本線經由上野発19時5分の青森行急行「八甲田」の向かい合った4人掛け席の窓側を確保。11時間10分の旅に出発。

うつらうつらしている間も列車はしつかり走り6時15分青森着。青森から函館までは青函連絡船で3時間50分。ごろ寝スベースで「八甲田」の睡眠不足を補う。11時20分初の北海道へ上陸。まだまだ国鉄が元気だった頃の北海道、玄関口は函館駅。エンジン音を響かせて11時40分発特急「おおぞら3号」釧路行、同45分発同「おとり」網走行、そして乗車予定の同50分発急行「宗谷」稚内行が発車を待っている。

2本の特急の後、急行「宗谷」はおもむろに発車。函館市内の景色はあつという間に終わり、大沼公園等の郊外の美しい景色の中を「宗谷」は走る。全て函館本線經由の「宗谷」から長万部で下車。先行の特急が通過した室蘭本線・千歳線經由の普通列車に乗り換え、洞爺湖畔泊。翌日は室蘭本線を更に進み苦小牧へ。苦小牧の一つ先の沼ノ端は室蘭本線と千歳線の分岐駅で、力強い蒸気機関車D51(デゴイチ)牽引の貨物列車がひっきりなしに通る。カメラ

片手に若い機関士さんに手を振ったら、敬礼を返してくれた。
翌日は苦小牧から日高本線で終点の様似まで急行でも3時間かかる150キロの旅。沿線は競走馬の故郷。「襟裳の夏はー♪」と襟裳岬訪問。帰りは東側へ出て広尾から広尾線で帯広へ。この線は愛国駅と幸福駅のあることで有名だった。「愛の国から幸福へ」国鉄広尾線をご利用頂き有難うございます「車掌のアナウンスと共に帯広着。帯広は明るく大らかで旅行者にやさしい街。駅から徒歩圏に夏休み限定・宿泊費無料のテント村があった。カニ族「リュックを背負って移動する学生等の節約旅行者」のメッカであった。道内の観光地で見かけた旅仲間とこのテントで再会することもあった。翌日は帯広駅前8時発の国鉄バスで富内線の終点日高町へ向かう。同駅を2時間後に発車する日高本線苦小牧行普通列車をジャガイモの花を眺めながら待つ。

苦小牧から千歳線で札幌へ。北の果ての稚内へは札幌21時20分発宗谷本線經由・寝台急行「利尻」で。6時25分稚内着。最北の鉄道の終焉を実感した後、宗谷岬等を見学。稚内発18時5分の急行「礼文」で旭川へ向かう。稚内から二つ目の抜海で旭川11時発の稚内行普通列車(321列車)とすれ違う。準備不足で写真は撮れなかったが、利尻富士をバックにしたD51牽引の混合列車(編成の前面に貨車、後面に客車を連結)は夕焼けに映え、その美しさは今も脳裏にしっかりと刻まれている。

旭川から石北本線で網走へ向かい、網走湖、刑務所、原生花園を見学した。網走からは釧網本線で斜里下車。ウトロから知床半島・知床五湖を巡った後、展望台から澄んだ摩周湖を眺める。釧網本線で釧路へ向かい一泊。翌朝釧路6時25分発の急行「ノサップ1号」根室行に乗り。

駅間距離が10キロ前後の所が多々あり、まさに原野を駆け抜ける鉄道のイメージ。駅は最近廃止となった日本の最東端駅の東根室を過ぎ、やや西へカーブすると終点の根室。(8時51分着)納沙布岬で未だ帰らぬ北方領土へ思いをはせる。未乗区間はあるも、これで北海道国鉄線の大所は乗車し終え、その雄大さに感服しつつ、函館から青函連絡船に乗り込み、青森から奥羽本線・羽越本線・信越本線・上越線經由で帰京したのだ。

著者プロフィール

おお と ば ゆう た ろう
大鳥羽 裕太郎



1951年大阪府枚方市生
1975年一橋大学社会学部卒、三菱重工業(株)入社、横浜製作所人事、経理、営業管理を担当。
1992～2000年ブラジルの関連会社で管理業務全般を担当。
趣味は小学生からの「鉄道全般」、高校生からの「中・長距離走(今はジョギング)」、定年後始めた「俳句」。亡父も会員だったジョークサロンへの参加と笑品「(幸福(=交友)録)」「(頓珍漢な会話)」執筆を楽しんでいる。